コードギアス　　相反する王～双璧の軌跡～

star

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コードギアス　相反する王～双璧の軌跡～

【Ｎコード】
Ｎ９７２１Ｖ

【作者名】
ｓｔａｒ

【あらすじ】
一つの悲劇が回避され、新たな悲劇が訪れる。負の連鎖は止まらなかった。
深い闇に堕ちたライ。カレンは一途にパートナーの、愛する者の目覚めを待つ。たとえ、他の者達がライを忘れようとも……そんな中、ある人物が彼女の元を訪れる。この時、彼らの物語は完全に変貌した……
騎士団ルート、スザクにギアスをかけたＢＡＤＥＮＤのお話。ライ

カレです。
元々は番外編で投稿したんですが、思いついてきたので投稿しました。

第一話　悲劇の連鎖（前書き）

ＢＡＤＥＮＤから始まる物語。
ここから悲劇は始まった……

第一話　悲劇の連鎖

カレンと学園祭を見て回った。戦い続きの連続で、久しぶりにカレンとゆっくりできた。本当に楽しかった。またこうしてカレンと一緒にいたいと、そう思っていたのに……

なのに、現実がそれを許してはくれなかった。事態は止まることなく、僕達に試練を突きつけてくる。

お忍びで来ていたのか、ユーフェミアが学園祭の場で『行政特区日本』の設立を宣言した。

彼女の発言が、その場どころか日本全体……いや、ブリタニアをも、世界さえをも巻き込む騒ぎを呼ぶ。

聞こえこそいいかもしれない。

だが、もし騎士団が参加すれば日本独立という大義名分が奪われ、参加しなければ平和の敵として民衆の信用を失う。

……つまり行政特区日本は騎士団にとって、一挙に追い詰める策でしかなかったのだ。

学園祭は混乱と騒乱の内に終了した。僕は生徒会の雑事も一段落させ、一息つこうとクラブハウスの裏手に出た。

先客がいた。

「……」

スザクは無言で夕陽を眺めている。

「……スザク」

「やあ、ライ……」

いつもの学園でのスザク。穏やかな笑顔。戦闘時の覇気はまったく感じられない人懐っこい顔だ。

「なぜ……僕とカレンのことを……」

僕とカレンが騎士団に所属しているということは神根島の一件で

既にスザクに知られている。
だからこそ警戒していたのだが、スザクと学園で会っても、あの日からまったく変化はない。

「軍規違反なのはわかっている。だけど、こっちでは戦いでなく、君たちを説得したい」

「……」

「君やカレンにしたら甘い考えかな？　だけど、あきらめたくないんだ」

「……それが、君の道か」

「うん……そうだ。君たちも、ユーフェミア様の特区に参加してくれ！」

「僕たちが、特区日本に？」

「そうだ。君たち黒の騎士団が参加すれば、ほかの日本人たちもきっと特区に賛同してくれるはずだ。戦いを終わらせることができるんだ。平和が作れる。みんなの平和が！」

それは、夢物語だ。現実は甘くない。ユーフェミアは理想を語っただけで、スザクはそれを信じているだけだ。

……ここでギアスを使えば、特区は……騎士団は……

スザク。君は間違っているんだ。間違った世界を破壊するのなら、その内側に取り込まれてはいけない。

「スザク！」

「……？」

「ライが命じる！　黒の騎士団に加わり、ゼロの進む道を切り開け！」

僕は全ての力を声にこめて、スザクに命令した……絶対遵守の、王の力で……

「う……あ……僕が……？！　ゼロ……お、俺が……騎士団……」

スザクが苦しみはじめた。なんなんだこれは……？　王の力に抵抗しているのか！？

これまでギアスを使った相手で、こんな反応は見たことがなかった。

「あ……と、父さん……嫌……だ……ぐぅッ……」

……これが、スザクの意志の強さというのだろうか？

ギアスの命令にも抗う、この強さが。

「ぐ……ぁ……あああーーーッ！」

……しばらく苦しみ悶えていたスザクだったが、やがて静かに立ち上がった。彼の瞳は赤く縁取られていた。

ギアスにかかった者がしている、独特な目を……

「分かった。黒の騎士団に加わろう。僕が、ゼロの進む道を切り開く！」

……これでいい。これで、黒の騎士団は最大の障害を排除し、最強の戦力を手に入れたのだ。

ゼロも喜んでくれるだろう。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

スザクの黒の騎士団加入によって、事態は一気に動き出した。

ユーフェミアの唱えた特区日本構想は、彼女の騎士であり、恭順派の希望の星でもあったスザクの離脱で崩壊した。

スザクが見捨てたと言うことは、結局、それが口先だけの懐柔策だったのだろうと日本人は判断したのである。

黒の騎士団はこの機を逃さず武力蜂起。ゼロとスザクを先頭にトウキョウ租界を一気に制圧したのである。

トウキョウ租界の陥落は始まりに過ぎなかった。黒の騎士団に呼応し、全国で名誉ブリタニア人も含めた日本人が蜂起。

またたく間に広がった解放戦争の炎はついにブリタニア軍の撤退という結果を勝ち取り、ゼロは高らかに宣言した——『合衆国日本』の建国を。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

「よく来てくれたな、ライ」

「なんだ？　ふたりだけで話とは？」

日本が解放され、今日は団員達によってアジトで祝勝会が開かれているのだが、僕はゼロに呼び出され、人気のないゲットーの倉庫街に来ていた。

「なに、礼を言いたくてな。スザクを仲間にしてくれた礼を」

「ゼロとスザクの力が合わされば、もはや敵はないさ。事実、日本は独立を取り戻した。
　これからブリタニアが攻め込んできたとしても、ゼロやスザク、藤堂さん……そして僕とカレンの騎士団の双璧がいれば、日本は安泰だ」

「ああ、できればそうしたかったよ……お前と共に、これからも戦っていきたかった……」

「？　ゼロ？」

「スザクを仲間にした……その結果をもたらしたことは感謝している……ただ一点を除けば」

「ただ、一点？」

「あのスザクが、一夜のうちに我々の考えに賛同して合流してきた理由だ」

「それは……僕とスザクが話し合って」

「話し合った結果、ギアスを使った」

「！？」

「そうだな？」

「……すべては、君のためだ。君と共に歩む道を切り開くため。あの状況を打破するためにも必要だった……君だってスザクを仲間に迎えたがっていただろう！」

「俺は、スザク自身の意志で賛同して貰いたかったんだ！　そうでないならば、敵同士になったほうがましだった！」

「！」

「お前は、俺の意地とプライドと……そして友情に泥を塗った！この行為は許し難い！」

「何を言ってる……僕こそ、君の……」

ゼロの仮面が一部開き、瞳が見えた。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが汝に命じる！　永遠の闇に眠れ！　ライ！」

なぜだ？

どうしてだゼロ。ただ僕は君のために……みんなの、日本のために……

「……ル、ルルーシュ……」

「おやすみ、ライ」

昔、契約者が言ったこととと同じ言葉。なのに、ルルーシュの声には何も感情がこもっていなかった。

僕はまた眠りについた。ただしあのころと違って、底の見えない……永遠の闇の中に……

第二話　　届かない声（前書き）

行政特区をユーフェミアが宣言した日に、ライがスザクに『騎士団に加われ！』とギアスをかけてしまいます。
スザクが騎士団に加わったことで日本解放には成功するものの、ゼロの反感を買ってしまったライ……

正直言って、「これはないだろ」って思いましたね。

というかルルーシュに言いたいことがあります……
「ＤＳでスザクに『仲間になれ！』ってギアスをかけるお前が言うな！」

第二話　　届かない声

黒の騎士団は最大の障害を排除し、最強の戦力を手に入れた。

ゼロと私達騎士団の双璧、スザクと言った面々の前に、コーネリアでさえも戦況を立て直すことができず、ついに日本を取り戻した！

今日は祝勝会ということで、アジトは今までにない盛り上がりを見せている。今までの戦いがようやく実をむすんだんだから、その喜びは計り知れない。

……なのに、どうしてあなたがいないの？　ライ……

これまでの戦いの中でも数々の戦功をたててきた、ライの姿だけがどれだけ探しても見つからない。

「扇さん、ライを見てませんか？」

「いや、まだ見ていないが……来ていないのか？」

「先ほどから電話もかけてるんですけど……全然でないんです」

ゼロの姿も見えないが、ゼロは元々神出鬼没だったしそんなに心配していない。こういう賑やかな場に積極的に参加するとも思えないし……

だけど、ライは？

ライも日本開放のために共に戦ってきて、その喜びも大きいはず。みんなで一緒に集まって喜びを分かち合う人なのに……全然姿を現さない。

「（ライ……あなた、一体どこに）……【ピピピピピ】！　もしもし！」

『カレンか……今から私が言う病院にすぐ来てくれ』

「ゼロ！　病院って……なんでですか？」

『……ライのことだ。詳しくは今は言えない。すぐに来てくれ！』

「！　わかりました！」

ライが、病院に？　それに、今は言えないって……まさか、ライの身に何かが！？

私は扇さんに一言言うと、アジトを後にした。なんだかよくわからないけど……嫌な予感しかしない……！！

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

病院に着いた私はすぐさま二人を探す。

すると、病室の前で座り込んだゼロの姿が見えた。

「ゼロ！」

『……カレンか』

「ライは……ライはどこに！？」

『ここだ』

ゼロが目の前の病室を指差す。

……病室の中では点滴を受けて、静かに眠っているライの姿があった。

「ライ！」

私はいても立ってもいられず、病室の中に入っていく。

……しかし、何度呼びかけても声は返ってこない。何度手を握っても握り返してこない。

「……ライ？」

「彼は今……意識を完全に失っています。つまり、植物人間の状況に陥っています。回復は……難しいかと」

「！！！」

私は思わず専門医の胸倉を掴んでいた。

「どういうこと！？」

「わ、わからないんです！　体に外傷がなければ異常はありませんし、臓器にも問題はない。原因がまったくつかめないんです！
まるで……彼自身が目覚めるのを拒絶しているような……」

「ふ、ふざけないで！！　そんなことがあるわけ……！！」

『やめろカレン！』

「！　ゼロ……それじゃあ……ライは……」

『……』

「！」

ゼロは何も言わずに、首を横に振った。

つまりそれは、ゼロもライの回復は望めないと判断したと言うこと……嘘だ！！

「ねえライ！　起きて！！　私よ、紅月カレン！！

嘘でしょ、もう起きないなんて……私を驚かそうとしてるんでしょ！？　ねえ！」

私はライの腕を持ちながら、ライの肩をゆすりながら、ライにひたすら呼びかける。

信じられない！　信じたくない！！　やっと、やっと日本を取り戻して、みんなで一緒にいられると思ったのに……なのに！！

何度も声をかけた。何度もライの手を握りしめた。

それでも、彼は何の反応も示さなかった。目を開けなかった。何もしゃべらなかった。

あの青い綺麗な目が見えない。
いつも私を気遣ってくれた優しい声が聞こえない。
私を勇気付けるために私の手を握ってくれたあの感触が感じられない。

彼の時は……完全に止まっていた。

「お願いだから……もう自分勝手なことなんてしないから！　困らせたりしないから！　ずっと傍にいるから！
だから……だから目を開けてよライ！！」

どれだけ叫んでも、病室には私の声だけが響いている。
ライは指一本動かさない。

「お願い、だから……傍にいて……私を、一人にしないで！！」
『カレン……無駄だ。いくら呼びかけても、ライは……もう……』
「！　嘘よ……そんなの、そんなのって……ッ！　ライイイィィィィィィ！！！」

私はただ叫ぶことしかできなかった。叫んでもライは反応しないとわかっているのに。
それでも、信じたくはなかった。認めたくはなかった。

私達は日本を取り戻した。その代わり、それ以上に大切な人を失ってしまった……

誰よりも日本のことを、私たちのことを思ってくれていたライを……

第二話　届かない声（後書き）

カ「ライ……ライ…！！」

ル「……」

C「……」

作「……（重い！　今までの後書きの中で一番空気が重い……！）えー、どうだったでしょうか？　一応ギアスをかけた後、ルルーシュがライを病院に運んだという設定です。いや、本当に捨て置いたっていうなら本当にルルーシュが人でなしのように感じますし……」

ル「あいつがしたことは許せない……だが、あいつが今まで俺達のために戦ってきたのも事実……」

作「各々が様々な思いをめぐらす中、事態は加速していく。はたして彼らの運命は……！？」

第三話　紅蓮の騎士、迷走

一週間。日本がブリタニアから解放されて一週間がたとうとしていた。

未だに日本に残るブリタニア軍の残党・地方部隊を掃討し、もはや日本は完全にブリタニアから独立したと言ってもいい。

ブリタニアは数多くの植民地を持っているが、その植民地が独立してしまうなど前代未聞の事態であり、日本に呼応してほかのエリアでも反ブリタニア活動が広まっているという。

そのため、ブリタニアはＥＵや日本だけでなくこうしたエリアの対処にまで部隊を動かさなければならなくなり、日本にには一時の平穏が訪れていた。

騎士団の皆は遂にブリタニアの勢力を一掃し、皆生き生きとしている……ただ一人、私を除いて。

この一週間で、騎士団の皆がライのお見舞いに来る数が減ってしまった。
皆、新しい日本の国作りやブリタニアの防衛に向けて忙しい毎日が続いている。

私は怖くなってきた。そのうち、皆がライのことを忘れてしまうのではないかって。

今では、騎士団の双璧と言えば私とスザクと言われるようにまでなってきた。
ライと一緒に戦い抜いて、背中を預けるほどになって手に入れた『双璧』の名が、今ではスザクのものになっている。皆、今はいないライよりも、今いるスザクの方が大切なのだろうか……

……たとえ、皆がライのことを忘れても、せめて私だけは覚えていたい。最後まで、ライの目覚めを傍で待っていたい。

「……ライ」

いつからだっただろう。
日本より、ライの方が大切になっていた。
日本の解放より、ライの傍にいたかった。

あの日から何度も後悔している。
ちゃんと想いを伝えておけばよかった。ただ一言、『好き』と伝えておけばよかった。

「ねえ、どうしてこんなことになっちゃったのかな？」

何が間違いだったのだろう。どこで間違ったのだろう。

一緒に学園祭も楽しんで、日本も開放して、皆と一緒にいられるはずだった。
なのに、誰よりも一緒にいたかった貴方がいない……

これから私はどうすればいいんだろう？
今までは、戦い抜けば明るい未来が待っていると信じていたのに、その望みはあっけなく崩れ去った。

神様というものは本当に残酷だ。
絶望から救い出されたと思ったら、今度は更に深い絶望を私達に突きつける。

もう、ナイトメアにも乗れないよ。何のために戦えばいいのかがわからない。
もう、ライの傍から離れたくない。これ以上貴方と離れたくない。

「ライ……好き。愛してる……お願い、目を覚ましてよ」

貴方の声を聞きたい、貴方の綺麗な目が見たい、貴方が手を握ってくる感触をかみしめたい。
ライ。お願いだからもう一度呼んで、私の名前を……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「本当に、弱いわね。私は」

冷静さを取り戻すために、一度飲み物を買いに病室から出た。
もしライがいたら、優しい彼のことだ。そっと励ましてくれただろう。
いなくなってからやっとわかった。彼の優しさが、温かみが。
私の強さは、全部ライがいたからこそだったんだ。ライがいたからここまで戦ってこれたんだ。
どうしてもっと早くに気付かなかったんだろう。

「ライ……」

病室に戻っても、ライは眠ったままだった。
最初はひょっとしたらと期待していたけど、そんなことは起こらなかった。
彼はひたすら夢を見続けている。現実に戻ってきて欲しいと願っても、彼は目を覚まさない。

「何が悪かったのかな？　どうして、こんなことになっちゃったのかな？」

私にはもうわからない。何が悪かったのか。どうすれば、彼が助かったのか。

「教えてあげようか？」

「！　……子供？　どうしてここに」

突然私の呟きに答えるように、後ろから声がかかった。
身長から……小学生くらいだろうか？　髪がとても長く、床に届く勢いの金髪をしている。

「はじめまして、紅月カレン。僕の名前はＶ．Ｖ．」

「Ｖ．Ｖ．？」

何なのこの子……？　Ｃ．Ｃ．みたいな名前、そして見た目とはかけ離れて大人びた様子。

それに、どうして私の名前を！？

「細かいことは気にしなくていいよ。僕は君に真実を教えにきたんだ」

「真実……？」

「そう。例えば……どうしてライが目を覚まさないのか、とかね」

「！　どういうこと！？　なんで、ライのことを……ッ！」

どうして私やライのことを知っているかなんてもうどうでもいい！この子は知っている！　誰もわからない、ライがこうなった原因を！

「やっぱりゼロからは聞いていないんだね。言えるわけないか。彼がこんなことをしたんだもんね」

「！？」

ゼロが……！？　そんなことあるわけが……彼も、私も、日本人がみんな信じているあの人が……

「ゼロは、超常の力を持っている。他人を意のままに操る力を」

「そんな、馬鹿な話が……」

「君は不思議に思わない？　なぜ体に何の異常もない彼が目を覚まさないのか。むしろ辻褄が合うはずだよ。力があったとして、今までのゼロの行動を振り返れば……ライは、ゼロのせいで、目を覚まさないんだ」

「……」

「まだ信じられないかい？　なら教えてあげるよ。ゼロの正体、力の詳細、彼がその力で今まで一体何をしてきたのか……そしてどうすればライが目を覚ますのかを」

「……」

「聞くだけでいいんだ。それをどう判断するかは君しだい。君の考えで動けばいい」

たとえ、ゼロのことが嘘だとしても……本当にライが目を覚ますなら、私は……

私は何も言わずに、こくりと頷いた。

第三話　紅蓮の騎士、迷走（後書き）

作「……これなんてカレン裏切りフラグ？」

ル「こればかりは、ライにしかとめられない……」

作「しかし、そのライがこの状態ですしね。えー、このカレンはアニメ一期以上にルルーシュへの不信感が高まってますね。次回でライ復活するでしょうけどキャンセラーで」

C「ルルーシュ・スザクVSライ・カレンか……枢木が騎士団に加わり、双璧がブリタニアに付くというのか……皮肉な話だな」

作「騎士団（ルルーシュ・スザク）VSブリタニア（ライ・カレン）みたいな？　でもライは戸惑うでしょうね。騎士団と戦うこともですけど、カレンが自分のせいでブリタニアにつくってことに……」

C「カレンはむしろ……『ゼロ……よくも、よくもライを……！』みたいな形で襲い掛かりそうだがな」

作「ルルーシュが『俺たち二人揃えばできないことなんて……！』って言ってましたが、その二人と双璧が正面衝突する……！　どちらが勝つんでしょう？　微妙なところなんですが……」

第四話　反逆の双壁

一つの国と一人の人。どちらか一つだけを選べといわれたら当然皆が国を選ぶだろう。

私だって今までならそうしたはずだった。どれだけ誰かを大切に思ったとしても、好きになったとしても、日本を捨てることはないとずっと思っていた。

だけど私は日本よりも、ライを選んだ。

国よりも、組織よりも、仲間よりも――たった一人の人を選んだ。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

……闇。闇。闇……何も見えない。何も聞こえない。何も感じない。

『永遠の闇に眠れ』というルルーシュのギアス。その闇はあまりにも何もなくて、あまりにも残酷だった。

おそらく今の僕はまだ生きているのだろう。生きていなければ、この闇だって消えているのだから。

眠れといっても夢を見ているわけではない。だけど、これは悪夢以上にたちが悪い。

……あれからどれくらいたったんだろう。

数日？　数週間？　数ヶ月？　あるいは数年？　もっとだろうか、それさえわからない……みんなはどうしてるんだろう。

カレンは大丈夫だろうか？　やさしい彼女は多分僕のことを心配しているだろうけど、僕はその彼女に何もしてあげることもできない。むしろ迷惑をかけているんじゃないだろうか……

せめて、僕のことを忘れてくれていればいいんだけど……せめて、僕のことを忘れて、誰かと幸せに生きてくれれば、僕はそれで……

「ライ？」

……？　カレン？　カレンの声が……聞こえる？
なんでだろう。今までは何も聞こえなかった空間から、僕が求める声が聞こえた。

「ライ！」

……これは、夢なのか？　それとも……

「ライ、起きて！」

……？　光が見えて……！

「ライ！　ライ！　良かった！　良かった……！」

「……か、カレン！？」

カレンが僕の温もりを確かめるように、力強く抱きしめてきた。見える……？　まさか、ギアスが解けたのか！？　絶対遵守の王の力が、何で！？

「目が覚めたのかい？」

「はじめまして、ライゼル様」

「！　誰だ！？　……！　ジェ、ジェレミア！？」

見ると部屋にいたのはカレンだけではなかった。

小さな子供と……そして、かつてナリタの戦いで戦死したはずのジェレミア・ゴットバルトだった。

「僕の名前はＶ・Ｖ・。彼女にお願いされて、君を起こさせたんだよ。ジェレミアの、ギアスキャンセラーで」

「……ギアスキャンセラー？」

「そう。どんなギアスであろうと、ギアスキャンセラーはそのギアスを解除することができる。たとえ、王の力であろうとね」

「はい。私のキャンセラーはどのような力にも対応できます」

「……それじゃあ、本当に『ギアス』っていうのは本当だったのね」

「！？　ま、待て！　なんでカレンがギアスのことを……」

なんでカレンが……彼女には僕だって話していない！　力も見せていない！　なのになんで彼女が！？

「……ライ。全て聞いたわ。ギアスのことも、ルルーシュがゼロだったってことも……」

「！？」

「僕が話させてもらったよ」

「……君は何者なんだ？　なぜゼロのことを知っている？」

見た目は小学生と変わらないくらいなのに、先ほどからの口調や、知っている内容、明らかに小学生とは思えない。

「C．C．と似たようなものだよ。僕も不老不死ってことさ」
「君も……C．C．と同じ……」
「まあ、僕らは一度退室するから二人でゆっくり話しな。特にライはまだ情報が足りないだろうしね」
「ごゆっくり。ライゼル様」
「！　……ジェレミア卿、僕のことをその名で呼ぶのはやめていただきたい」
「しかし、貴方様はブリタニアの……」
「僕はもう狂王ではない。ただのライだ」
「……わかりました。ライ様申し訳ありません」
「様もいいんだけど……まあいいか」
「そういう性分ですので……私めもお話したいことはございますが、それは後ほど。それでは、また」

そういって二人は退出していった。今部屋にいるのは僕とカレンだけとなった。
いくら助けてもらったといっても、まだ彼らを信用はできない。

「……ひとまず基本事項を聞きたいんだけど、ここはどこだ？　僕が眠ってからどれくらいたった？」

「ここは、ブリタニアの離宮だそうよ。なんでも、皇帝が密かに作った場所だそうで、誰も知らないみたい。
それと、貴方が眠ってから一ヶ月くらいがたった……日本はもう解放されてるし、皆も元気だった」

……ブリタニアの離宮。つまり、カレンが日本を捨てたってことか……僕のせいか。僕のために、カレンは日本を、母国を捨ててしまったのか。今までの戦う理由だったものを。

「……ライ。私は何も後悔していないよ？　むしろ、貴方が目をさまして本当に嬉しく思っている。
私はずっと不安だった。怖かった。私はもう、貴方と一緒じゃなきゃ嫌だ……お願いだから、もうどこにも行かないで。もう消えないで。私を一人にしないで……そのためなら私はなんでもするから……」

「カレン……ごめんね。ありがとうね。僕を覚えていてくれて」

「ライ……好き。私は、貴方のことを愛してる」

「！　……ありがとう、カレン。僕も、君のことが好きだ。誰より

も、君だけが」

「うん！」

……その後、僕は打ち明けた。

僕の過去を、僕もギアス所有者だということを。そしてスザクにギアスをかけたこと。ルルーシュが僕にギアスをかけたことも……

「……ライは何も悪くないわ。家族を守るために戦って、そしてこの時代でも私達と一緒に戦った。

スザクのことだって組織のためにやったことで、現状を考えれば間違っていなかった。そうでなければ、日本だってまだ解放されてなんていなかった。悪いのは、現状を受け入れなかった、わかろうとしなかったルルーシュよ」

過去を話しても、ギアスを所持していると知っても、スザクにギアスをかけたことを話しても、カレンはそれでも僕を信じてくれた。

本当にカレンは優しい。普通の人間なら、僕を嫌悪し拒絶するだろうに。
それなのに彼女は許した。それどころか、受け入れてくれた。罪深い僕を……

「私、ルルーシュが許せない。ギアスキャンセラーがなければ、ただ死を待つだけだったのに、そんな状態にライを、仲間を陥れるなんて……！」

「カレン。君が僕を思ってくれるように、彼も友達が大切なんだよ」

「それでも、許せない。ルルーシュは絶対に……！」

「カレン」

「！」

静かにカレンを引き寄せて、彼女の頭を撫でた。
こうしたのも、全て僕の行動のせいなんだ。彼女に憎しみを持たせてしまったのも、全て僕のせいだ……

「カレンごめんね。もう、どこにも行かないから……君の背中は僕が守るから」

「うん！　うん！」

カレンの頬に右手を当て、彼女の顔を自分の顔へと引き寄せる。

「ん……」

「……っ」

口付けは一瞬だった。だけど、カレンの頬は彼女の髪の毛のように、真赤に染まっている。

僕も多分そうなってると思う。勢いでしてしまったけれど、これがはじめてのことだった。

「一緒に行こう。どこまでも、二人で」

「うん。ライと一緒なら、私はどこにでも行く。だから、もうどこにも行かないで」

「ああ、約束する。僕達はいつまでも、ずっと一緒だ」

これから歩むのは今まで以上に修羅の道。
それでも、もうこの道を進むしかないというのなら、僕は迷わず進もう。カレンと共に……
僕を信じてくれたカレンを、もう失わないように……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――日本―――

合衆国日本の首都トウキョウ。その政庁だった場所には今、俺と扇がいる。
「どうだ？　中華連邦は何か言ってきたか？」
「ああ。一週間後、会談の場所を設けるそうだ」
「そうか……ライとカレンについての情報は、まだ入らないか？」

一ヶ月ほど前、カレンが作戦途中で突然命令を無視し戦線離脱。紅蓮と共に姿を消した。
そして病室で寝ていたはずのライも姿を消し、さらにあいつの愛機、月下までなくなっていた。
かつて騎士団の双璧と呼ばれたあいつらが突然いなくなり、今でもその行方がわからない……一体、あいつらはどこに行ったんだ？

「いや……全然だ」

「そうか。私も彼らのことは心配している。情報が入り次第、連絡を」

「ああ、わかった……「大変だ！ゼロ！」　！　玉城？」

「玉城か……何があった？」

「それがよ、全世界に向けてブリタニア皇帝の演説が始まるそうだ！」

「……ブリタニアがついに本格的に動くのか……わかった。騎士団幹部を作戦室に集めろ！」

「あ、ああ。今から連絡する」

しかし、皇帝が今更なぜ？　今まで日本が解放されてからも自分からは動かなかったあの男が……本国でなにか動きがあったのか？

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――作戦室―――

作戦室には幹部が皆集まっており、モニターには丁度皇帝が演説を始めようとしていた。謁見の間にはブリタニア皇族や上流貴族が並んでいる。

『皆のもの、忙しい中ご苦労であった。今日集めたのは他でも無い、新たな皇族の紹介をしようと思ってな』

「皇族？」

新たな皇族……今まで表舞台に出てこなかった人間をこの時期に国際発表で？
まさかその人間をＥＵか日本の舞台の総司令にでも祭り上げるとでも言うつもりか？
……ばかばかしい。戦場を知らずに、平和に過ごしてきた皇族にその任務が務まるわけがない。

『さあ、入って来い。みなの前に、その姿を示せ！』

皇帝の発言とともに後方の扉が開く。
誰もが新たな皇族、それも最上位の権力をもつ人間を見ようと振り返る。
だが、扉から入ってきたのは……

「……え？」
「嘘……」
「まさか……」

なぜ……なぜお前達が？　なぜそこにいる！？

『ライ・エル・ブリタニア。ただ今参りました』

見間違えるわけがない。ライが、カレンとジャレミアを引き連れて謁見の間に入ってきた。

『紹介しよう。新たな皇族ライ。この者の王位継承権は三位！　今は亡きクロヴィスの地位と権限を与える！』

「な！？」
「ライが皇族！？　おまけに三位！？」
「どういうことだよ！」

幹部の間に動揺が広がる……当たり前だ！　俺とて、信じられない。今にも叫んでしまいそうだ。

なんであいつらが……いや、その前になぜライが目覚めている！？　ギアスが解けたのか！？　そんなことが……！

『そして傍にたっておるのはこやつの選任騎士、カレン・シュタットフェルト！
並びに親衛隊隊長のジェレミア・ゴットバルト！』

「カレンまで！？」
「おまけに、紅月ではなくブリタニアの性を！？」
「それに、親衛隊長ってあのオレンジじゃないか！」

意味がわからない……なぜ、なぜ、なぜ！？
ライ、カレン、ジャレミア。三人の行方不明者が突然姿を現したと思ったらこの状態。一体、何がどうなっている！？

『この者達には、先日我が領土から独立した合衆国日本の掃討を命ずる！！』

「「「な！？」」」

『謹んでお受けします。陛下』

ライが勅命を受けた……？　ライとカレンが、ここに攻めてくる！？　敵として、俺たちを討ちにくるだと！？
あいつらが、本当にブリタニアについたというのか！？

映像は途切れた。ここで国際発表は終了だというのだろう。

「ど、どういうことだよ！？　なんであいつらが……」
「落ち着け玉城！」
「なんで、カレンが……」
「ライ君まで……一体どういうことだ？」

「……ひとまず今日は解散する。まだあれが本当にライやカレンだという確信はない。各々、戦闘準備だけは怠るな！」

「あ、おいゼロ！」

幹部の制止を無視して部屋から退室した。
……俺だって信じたくない！　だが、あれは間違いなくライとカレンだった。
つまり、俺たちは今まで俺たちを守ってくれた双璧と戦わなけれ

ばならないんだから……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――ブリタニア―――

「お疲れ様、ライ」
「ああ。ありがとうカレン」

放送が終了した後、パーティーが開かれた。僕が新たに皇族として発表されたことで、後見人に着こうとしたり、同じ皇族として挨拶をするものがいた。
だけどその大半は利益を求めたり、僕を見極めようとする者達ばかりでとても窮屈なものだった。
カレンはカレンで声をかけられていたので、僕が彼女をつれていち早く会場からでたわけだが。

「……でも、ごめんね。これで君まで日本と戦うことになった。扇さん達もいるのに」

「最初から覚悟はしていたわ。貴方がいれば、私は大丈夫。あなたさえいれば、それでいい」

「ありがとう、カレン」

「……殿下～、お楽しみの最中もうしわけありませ～ん」

「失礼します、ライ殿下」

「ん？　貴方はたしか……」

部屋の中に、白衣に身を包んだ科学者のような男と、その助手のような女性が入ってきていた。

確か、以前スザクが所属していた……

「は～い、殿下たちのナイトメアの整備等を担当していますロイド・アスプルンドといいます。どうぞよろしく」

「ロイドさん、殿下に失礼でしょ！」

「え？　どうして？」

……噂で聞いたとおりだな。身分を特に気にすることなく、自己を貫くマッドサイエンティスト。

しかしながら、ランスロットなど数多くの兵器を作り出した天才科学者か……

「いえ、構いませんよセシルさん」

「え？　どうして私の名前を……」

「セシル・クルーミー。上司のロイド伯爵の補佐をしながらも、自身もフロートユニットを考案するなど、類まれなる才能を発揮する優秀な補佐官と聞いています」

「い、いえ、それほどでは……」

「謙遜する必要はありませんよ……噂で聞いたとおり貴方は美しい方だ」

「で、殿下！？」

「本当ですよ。そこらの美女にも劣らな……E！？」

「……ライ？」

……ッ！　いきなりカレンが足を思いっきり踏みつけてきた。なぜ！？

「ライ、余計な話はそこまでで……それでロイド伯爵、話とは？」

「は～い、殿下たちのナイトメアのことで～す」

「……ど、どうなっている？」

「月下も紅蓮もフロートの取り付けは完了していますし、頼まれた武装も完成しています。ＭＶＳもちゃんと取り付けていますので」

「そうか……」

「ただ、僕も気になってるんですけどね～。なんで殿下たちが騎士団のナイトメアを所持していたのかを。強奪したとか聞きましたけど……」

……ですよね。普通信じるわけないか。

まあ、一応姿かたちも変えてもらって戦場ではわからないようにしたけれど、整備していた人間の目はごまかせない。特に月下は僕にしか動かせないピーキーな機体だし……

「殿下が今まで何をしてきたかも知りたいですし、少し調べさせてもらっても……」

「死にたいのか？　ロイドよ」

「！　あ～ごめんなさい、ごめんなさい！」

「ジェレミア卿！」

「まったく……殿下、このジェレミア・ゴットバルト。ただ今親衛隊候補生の選抜より、帰還しました」

「ああ、ご苦労だった」

親衛隊のことはジェレミア卿に一任していた。この一ヶ月ほど彼と過ごし、彼のブリタニア、そして皇族への忠誠は本物であり、僕に対しても忠誠を誓っていると判断したからだ。

ジェレミア卿の方が軍の情報にも詳しいし、何より軍のものと親しい。

「それで、優秀な人材はいましたか？」

「特に目立ったのは……私のかつての同志の妹、マリーカ・ソレイシィでしょうか」

ジェレミアが書類を提示した。

マリーカ・ソレイシィ

士官候補生の少女。陸戦繰機科で最優秀の成績。

……兄、キューエル・ソレイシィはナリタの戦いで戦死。

「問題はないな。実戦経験こそ少ないが、能力は申し分ない。この調子で頼む」

「はっ！」

人材も揃ってきた。機体も最終調整が済めばいつでも出撃できる。

皇帝の命令では、一ヶ月以内に日本に攻め込めということ。それだけあれば、親衛隊の選抜・編成もできる。

一ヵ月後、僕達は大切な仲間だった者達と戦う。

だけど、せめてそれまでの間は、カレンと一緒にいたい。彼女は僕が守る。彼女の体も、心も……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

一ヵ月後、後に「東京決戦」と呼ばれるブリタニアと日本の間の総力戦が行われる。

ブリタニアの総司令は初軍務であるライ・エル・ブリタニア。
日本の総司令は黒の騎士団の総司令、ゼロ。

後に、今世紀最高の戦略家と呼ばれる二人の戦いが始まろうとし

ていた……

第四話　反逆の双璧（後書き）

作「完全に分かれました！　ジェレミアやロイド・セシル、さらにはマリーカといった面々がライに協力。本名は『ライゼル・エス・ブリタニア』なんですが、混乱を避けるために文字をいじって『ライ・エル・ブリタニア』になりました」

ル「……本当に全面戦争をするつもりか？」

C「本気で戦わせるとはな……」

作「次回は騎士団側のお話です。ルルーシュたちはどう動くのか……」

第五話　惑う者達

一一一合衆国日本　黒の騎士団一一一

「どうだディートハルト。ブリタニアの動きは？」

騎士団の作戦司令室。騎士団も日本防衛線に向けて軍備を充実させていた。
ここには在籍する幹部の代表が揃っている。メンバーはゼロ、扇、藤堂、ディートハルト。今はゼロがディートハルトの報告を受けていた。

「今のところ、軍備の調整中のようです。少なくとも、攻め込んできたとしても五日はかかるかと」

「わかった……暁や残月、なにより斑鳩の調整は？」

「暁、並びに残月は最終調整を残すのみ。しかしながら斑鳩の方は……厳しいかと、ラクシャータの言葉です」

「……そうか」

新型ナイトメア、暁と残月の補強は最低限のこと。すでにブリタニアはライやカレン、ジャレミアといった主力部隊を中心にフロートユニットを搭載した機体が出回っているという。
日本防衛戦においても、航空戦力で劣らないためにこちらも空で戦える戦力が必要だった。
少しでも戦力が欲しい中、斑鳩が出撃できないのは痛すぎる。

「……ならば、今は斑鳩を後回しにするよう伝えろ。それよりも、暁を大量に生産したほうがこちらも助かる」

「わかりました」

「……なあ、ゼロ。本当に、本当にライとカレンはブリタニアについたのか？」

「……事実だ。カレンのシュタットフェルト家も、ライの後継人となった。あの二人は……もはや敵だ！」

「……ッ！」

扇は今だ信じられないのか、ゼロに二人のことを聞いたが……聞くだけ無駄だった。
すでにあの二人はブリタニアの軍門に下ったと、団員は認識していた。

あの二人がブリタニアに加わったことは騎士団にも大きく影響した。
騎士団員の中に、ブリタニア軍に加わる離反者が出てきたのである。若いながらかつて双璧と呼ばれ、隊長に任命されるほどの実力を持ち、団員達の信頼を得た二人。その二人を慕うものは少なくなかった。それほど、彼らの存在は騎士団の中で大きかったのである。

「だがゼロよ。実際のところ我らが不利だということは変わらない。離反者が現れ、騎士団の戦力は低下している。地力で劣っている我らには、これ以上の戦力の低下は許されない」

「わかっている！　ディートハルト、新幹部の選出はどうなっている！？」

「オペレーターは三人確保しました……しかしながら、ナイトメアのパイロットは今だこれといった人材は見つかりません」

日本が解放され、新たに防衛の軍として人材を集めようと試みたが、これと言った実力者は現れなかった。最も、ライやカレンの抜けた穴を埋める者などいるはずがないのだが。
今の騎士団の戦力と呼べるのは藤堂、四聖剣、ルルーシュ、スザクくらいである。

「……中華連邦との外交はどうなっている？　神楽耶様は？」

「現在、天子と掛け合っているところですが……報告によると、上層部を憎んでいる派閥があるようで、彼らとも話を伺っているそうです」

「引き続き、連絡を頼む」

神楽耶の悲しみも大変なものだった。やっと従兄弟のスザクが目を覚ましたと思ったら、今度は同じく血のつながりがあり、頼りにしていたライとパートナーのカレンがブリタニアに。思わず、スザクの腕の中で涙していた。

だが、それでも彼女は日本の代表であるという矜持を捨てなかった。今も日本の代表として中国と掛け合っている。愛する祖国を守るために。

きっと、ライ達も目を覚ますとひたすらに信じて……

「藤堂、お前は騎士団の訓練を頼む。扇、ディートハルト。何か動きがあればすぐに伝えてくれ。スザクには、ランスロットの調整を済ませておくよう伝えてくれ」

「了解！」

ゼロは幹部達に通達すると、自室に戻っていった。自室にはC．C．がピザを食べて待っていた。

「ご苦労なことだなルルーシュ」

「……黙れピザ女」

「そう言うな。元はと言えば、お前が引き起こしたことだろう？お前がライにギアスをかけたことで、この悲劇が始まった」

「違う！　ライがスザクにギアスをかけなければこうはならなかった！

俺もナナリーも……スザクも、ライもカレンも！　今はきっと一緒にこの国でいられた！」

「本当にそうか？」

「何だと……？」

C．C．の言葉に苛立ちを隠せないルルーシュ。

しかしそんなルルーシュを無視し、C．C．は言葉を続ける。

「ライのやったことは別に戦略的に間違っていない。現に今まで騎士団はあの白兜に何度も苦しめられた。その白兜を行政特区日本の計画をつぶす形で味方に取り込んだ。
もしライがいなかったら……騎士団は今頃なかったかもしれないぞ？　お前とて、どうなっていたかわからない」

「それは……結果論だ！」

「何を今更……大事なのは過程ではなく、結果。そう言ったのはお前だろう？」

「……！」

「確かにライのやったことは正しいことではないかもしれない。だが、お前は友情にとらわれたことで……スザクという最大の戦力を手に入れ、ライとカレンという最高の戦力を失った。果たしてどうするのかな？」

「……お前は知っていたのか！？　ライが目を覚ましていたことを！　あいつらがブリタニアに行ったことを！」

「ああ、知っていた」

C．C．はさも当然のように答えるが、その様子がルルーシュの

怒りをさらに引き立てた。
ルルーシュは思わず彼女の胸倉をつかむ。

「なぜもっと早く言わなかった！？　それさえわかっていれば、まだ手のうちようはあった！」

「嘘をつくな。一体お前に何ができた？　ただ絶望に落ちるだけだろ……今更女々しいぞルルーシュ。
もうこうなったら……あの二人を殺すしかない」

「殺す……だと？」

「少なくともカレンはお前のことを殺しにくるだろうな。あいつはおそらくお前がライにギアスをかけたことを知った。そしてあいつは、ライのためならお前であろうと迷うことなく殺すだろう」

「……」

「ライも同じだ。あいつはカレンを一人にさせない。カレンが修羅の道を歩むのなら、あいつは迷うことなく共に進む……お前が殺さなければ、お前が殺されると言っている」

C．C．の言っていることは正しい。カレンはV．V．とライの話を聞き、真実を知った。そしてその上でライを受け入れ、ライにギアスをかけたルルーシュを恨んでいる。

ライも、一度カレンに悲しい思いをさせてしまった上に彼女をブリタニアに取り込ませてしまったことに深く負い目を感じている。カレンを守るためなら彼は仲間であろうとも戦うことに迷いを感じない。

二人はすでに、戦う覚悟を決めていた。騎士団と相反する覚悟ができていた。

「私を失望させるなよルルーシュ。私はお前が生きていればそれでいい」

「……」

ルルーシュは何一つ返事をすることができなかった。今だ何が正しかったのか……間違っていたのかを整理できていなかった。

部屋にはただ、C.C.がピザを食べる音だけが広がっていった。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「ライ……どうしてなんだ？　どうして君がブリタニアに……？」

スザクは自分に与えられた個室で一人呟いていた。今部屋にはスザクしかいないため、その声を聞いている者はいない。
彼の力のない声は自室に広がり、誰にも届くことなく消えていく。

「どうして、僕に進む道を教えてくれた君が……どうして僕達の道に君はいないんだ……」

ライがかけたギアスは『黒の騎士団に加わり、ゼロの進む道を切り開け！！』というもの。
たとえライが、ギアスをかけたライがブリタニアに加わろうともその効果は続く。

ゆえにスザクは迷っていた。騎士団に入ったのは間違いだったのではないかと。

「やっぱり、僕が間違っていたのか……？　僕はユフィと……ッ！

違う！　ゼロが正しいんだ！
ゼロの道が僕の道。そして、ゼロの道を切り開くのが僕の役目。
だから、ゼロの道を邪魔するなら……ライでも、カレンでも……
ユフィでも！　僕は……！！」

スザクの疑問もライのギアスによって打ち消されていく。王の力は彼のささいな迷いも許さなかった。

白き騎士は光を失った瞳で、友を……大切な者達と戦うことを決意していた。

「スザク君、今大丈夫か？」

「！　藤堂さん！　大丈夫です」

「失礼する」

スザクの許可を得て、藤堂が部屋に入ってくる。
師弟だった間柄、藤堂はスザク加入のことをとても喜んでいた。
騎士団幹部の中で、スザクに何の偏見もなく接する数少ない一人である。

「調子はどうだ？」

「大丈夫です。命令があれば、いつでも出撃できます」

「フッ、それは頼もしいな……ブリタニアがおそらくあと一週間たらずで攻め込んでくる。それまでにランスロットの調整をしておけとのことだ」

「わかりました」

本来ならこうして言葉を交わすこともなかっただろう。
以前は戦場で、ナイトメアの通信越しに話すだけだった。それが今、こうして仲間通しで話し合える。藤堂にとって、これほど嬉しいことはなかった。

「……君は大丈夫か？　ライ君や紅月君とは、クラスメイトだったんだろう？」

「関係ありません。彼らがゼロの道の妨げとなるのなら、僕が彼らを討ちます。ゼロの道を切り開くのは自分です！」

「……そうか。いや、それならいい。期待しているぞ」

「はい！」

（……どうなっている？　頼もしくはある……だが、何かがおかしい。あれほどゼロを否定していたスザク君が、今となってはゼロを肯定するどころかゼロを守るほどになった。一体彼に……いや、彼らに何があったんだ？）

スザクやライ達の変貌に疑問を感じつつ、藤堂はその疑問を心に留めた。
変わったのも個人の理由がある。その理由を自分が聞いても仕方がない。

藤堂は何も聞かずに、自分の任務を全うするため部屋を後にした。

第五話　惑う者達（後書き）

作「スザクが心配だ……」

ル「というか、今のスザクってギアスが二重にかかっているんだよな？」

作「ライとルルーシュのギアスにかかっている……こんなやつ初めてですよ。次回は再びライ達に視点を戻します」

設定

みなさんお久しぶりです。ｓｔａｒです。今日は相反の舞台設定についてお話していこうと思います。

「お久しぶりですライです。僕も参加させていただきます」

番外編から始まったこの物語、ゆえに設定などがいろいろ付け足したりする部分がけっこうあるので、ここで紹介しておこうと思います。

「まさか、連載になるとは思わなかっただろうね……」

ええ、感想でもそういったお言葉をいただきました。
……では早速、相反の設定について話しておきたいんですけど、まずは日本のことについて話しておきます。

「……原作とは違い、行政特区は起こらず、日本は解放された……」

そう。原作と違うのは、ライ君も言ったとおりこの時点で日本が

解放されたということ。
また、ブラックリベリオンの敗戦がなかったので、キョウト六家のメンバーが全員生き残っているということです。

「桐原さんたちか。経済面でも大きな役割を果たしていたが……」

戦前の政治にも関わっていた人たちですからね。解放後、日本の政治に大きく貢献しています。
今も日本の代表として、神楽耶が参謀役の桐原と数名の団員を連れて中華連邦に交渉しています。

「神楽耶様か……スザクが騎士団に入ったから、まだ良かったとも思えるけど、複雑だな。兄のように僕をしたってくれたのに……」

宿反では実際に義理の妹ですしね（笑）
それと黒の騎士団のことなんですけど、二期では日本が解放された後に何人か幹部が辞めていますが、相反では誰一人やめていません。なにしろブリタニアが健在ですし。
そしてカレンが務めていた零番隊隊長にはスザクがつきました。

「スザク……親衛隊にスザクか。零番隊はゼロの直属の部隊だし……厄介だな」

そして……騎士団についてもう一つ。
かつてライが務めていた『戦闘隊長』という職は完全になくなりました。ゼロの決定だったんですが、ライが騎士団を裏切ったと団員達に示すためです。

「……」

……まあ、騎士団のことはこの辺で。次は皆さんが気になっている……かもしれないアッシュフォード学園について。

「そういえば、学園の皆は？　生徒会のメンバーは？」

学園理事長・ルーベンは、一時ブリタニアへの撤退も考えたのですが、結局日本にとどまりました。ルルーシュ、ナナリーの両名を保護するために。生徒会のメンバーも学園にいます。
ただ、やはりブリタニアの生徒の中で本国に帰るという人が増えたので、生徒数の調整・日本との友好関係を築くため、日本人の生徒の受け入れを積極的に行っています……それでも日本人の入学は少ないですけど。

「なにしろ戦争してた相手だからな。そんなすぐには無理だろう……でも、生徒会のみんなが無事だったなら何よりだ」

日本についてはこんな感じです。次はブリタニアについて……

「まさに、今の僕達だな」

ええ……第三位王位継承者になり、選任騎士にカレン、新鋭隊長にジャレミアとなかなか濃いメンバーが揃ってますからね。それで、まずはライの部隊について紹介していこうと思います。

「いろいろ複雑なところがあるんだけど。ロイドさんたちまでいるし」

ロイド、そしてセシルはシュナイゼルの許可ももらい、特派は正式にライの専属開発チーム『キャメロット』となりました。今はライとカレンたちの専用機の強化。それと新量産期の製造に取り組んでいます。

「……最初は酷かった。シミュレータをいろいろやらされて……」

……まあ、シミュレータのことは後ほど語ろうと思います。なにしろ、今まで表舞台に出なかった皇族が、ラクシャータの月下に（しかもかなりピーキーな機体）乗れるわけないですからね。ロイドも気になったんですよ。

「まあ、月下や紅蓮が強化されるならいいけどさ……あとは、ジェレミア郷やマリーカの機体か」

ジェレミアの機体は皆さんおなじみのサザーランド・ジークです。ただし輻射障壁発生装置はなく、ジークフリートのブレイズルミナス、電磁装甲を装備。

マリーカの機体はヴィンセント……まあ、つまりは原作と同じです。色も含めて。

「あと、皆さんが気になっているのはおそらくコーネリアとユーフェミアのことかな？」

この二人は特に皇帝からの御咎めはありませんでした。（シャル

ルにとって、日本を失ったことよりもライを手に入れたことの方が大きかった）
ただし、コーネリアは自分から離宮に下がっていきました。ユーフェミアも同じく。ギルフォードたちも一緒です。

「なにしろ数々の国を植民地にし、『ブリタニアの魔女』と呼ばれた人が、反ブリタニア勢力に敗れたからね。やっぱり思うところがあったんだろう……ユーフェミアはスザクのこともあるし……」

それとコーネリアのことなんですが、一度ライと会い、十分に戦える男と判断し、日本征服戦にむけてダールトンをライの部隊に派遣しました。
彼はかつての日本制圧にも活躍し、軍略にも長けた将軍。ライにも忠誠を誓い、ライの部隊の訓練・他国の偵察を行っています。

「……なんか、本当に僕の部隊って濃いメンバーが揃ってないか？」

纏めると……

総司令　　ライ
選任騎士　　カレン

親衛隊隊長　ジャレミア
参謀・軍事総責任者　ダールトン
特務隊隊長　マリーカ
技術開発担当　ロイド
オペレーター　セシル

……色んなところから集めたな、おい。

「それ作ったの君だから」

ここまでなるとは思わなかった……あ、ダールトンの機体はヴィンセント。ギルフォードが乗っていた機体です。他の者達には、ヴィンセント・ウォード（量産機）やグロースター、サザーランドが配備されてます。

……とまあ、こんなかんじです。これで今回の説明はお終いです。

「皆さんどうでしたか？　感想や疑問はいつでもお待ちしていますのでよろしくお願いします」

では、また次回！

5．1話　　ライの実力

「……セシルさん。ロイドさんはいますか？」

「！　ライ殿下！　ようこそお越しくださいました。ロイドさんは……」

「ここにいますよ殿下～。お久しぶりですね」

「ええ。それで、今日を僕を呼んだ理由は？」

「ライのナイトメアになにか問題でも？」

今日、僕はロイドさんにナイトメアのことで呼ばれ、研究所に来ていた。当然のことながらカレンも護衛として同行している。
ロイドさん達にナイトメアの整備を頼んでまだ二日しかたっていないのだが……

「いえいえ、ナイトメアのことと言えばそうなんですが……どちらかと言いますと殿下ご自身のことでして……」

「僕のこと？」

「はい。正直に言いますと、殿下のあの機体は……とてもではありませんが初軍務の殿下に乗られる機体ではないと言いますか……」

「……なるほど。つまり、僕では役不足だとそう言いたいわけですか」

「！　違います殿下！　今回のこの機体……『月下』は、第七世代に相当するナイトメアの上に、出力傾向が他のナイトメアに比べピーキーで、普通のパイロットには扱いがたい代物なんです。
　しかもこの機体には輻射波動という特殊な武器が装備されており、軍人でもこれを完全に扱えそうなものはいません。ロイドさんの言い方が悪いだけで、決して殿下を侮っているわけではありません！」

「いや、別に責めているわけではないですよ。そのことは僕も承知の上ですから」

　セシルさんが必死に弁解をしてくるので一応誤解を解いておく。彼女も僕が皇族ということで、色々気遣いをかけてしまっているな……上司がロイドさんだし。
　そんなに気を使わなくていいと言ったんだが、彼女といい、ジェレミア卿といい生真面目な人が多い。

「それで？　僕を呼んだのはそれを言うためだけではないんでしょう？」

「ええ。殿下にはナイトメアのシミュレータやっていただこうと思いまして」

「シミュレータ？　実戦ではなくて？」

「もしものことがあったら大変ですからね～。
それに、殿下は一度サザーロンドを乗りこなして見せたじゃないですか」

「……それもそうか」

一度、ロイドさんの要望でサザーランドに乗った。もちろん、僕がパイロットとして任せられるかのテストだったのだが、文句なしの高得点をたたき出した。
Gにも対応しているし、実戦でも普通の機体なら大丈夫と判断されたわけだ。

「すでに月下のデータを入力しています」

「シミュレータをはいえ、並の力では動かせませんよ？」

「わかっています。早速はじめましょうか」

僕は早速シミュレータを開始することにした。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

「セシル君、よろしく」

「シミュレータを開始します。殿下、モニタに外の景色が映りましたら、前進してください」

セシルさんの言うとおり、目の前に架空の景色が映りだされた。

なんの障害もない平野だ。指示通りまずは前進する。

「戦闘管制に入ります。特派”月下”は現在単騎で哨戒任務を遂行中。進行方向上に小規模編成の敵ナイトメア部隊を発見。特派”月下”は速やかに敵対勢力を排除せよ」

「了解」

ペダルを踏み込み、速度を上げた。シミュレータと言っても、本物の月下のようなスピードをしっかりだしてくれる。ディスプレイ上の点がみるみる近づいてくる。

「敵部隊、まもなく交戦距離」

モニターに三騎のナイトメアが見えた……『無頼』だ。

スピードを落とすことなく正面にむけハンドガンを放つ。

敵は三方向に散らばった。

弾は当たらなかったが、もともと当てるつもりで撃ったわけじゃない。先に撃たれる前に、敵を散らすことが目的だ。

一番近い機体に狙いを定める。速度はそのまま維持し、すれ違いざまに制動刀で斬りつける。無頼は一撃で沈んだ。

斬撃と同時に急旋回し、残った二騎のうち片方を正面にとらえる。ハンドガンで即時撃破。

最後の一騎が側方から撃ってくるが、距離があるので楽に回避できる……いや、僕と月下なら、たとえ距離がなくても回避できる。

最後の一騎がアサルトライフルを連射しながら突っ込んでくる。

最小限の動きでこれをすべてかわし、距離がつまったところでハンドガンを撃ち返す。

これで最後の一機も戦闘不能になった。

「敵部隊の全滅を確認」

「すごいね～。接触から17秒で三騎を撃破……本当に戦場に出たことないんですか？」

「ライならこの程度、朝飯前よ」

外では三人が会話しているのが聞こえる。カレンも誇らしげに話すが……あまりそういうことを言うと、直のこと疑問をもつだろうから、あまり言わないで欲しいんだけどな。

「全弾ギリギリでかわしています。それも、操作の回数がペダルと操縦桿（そうじゅうかん）に対して、1秒間に最高12回もの入力をしています。それも機械のような正確さで」

「もし相手のナイトメアに人間が乗っていたら、亡霊と戦っているんじゃないかって思うだろうね。

真正面でほとんど動いていないように見える殿下の機体に、弾が

あたらずすり抜けていくんだから。
殿下は本当におもしろいですね〜。これならすごく良いデータがとれそうですよ、んふふ〜」

ロイドさんが興味津々といった感じで呟いている。最も、所詮はただの無頼だし、それほどたいしたことをやった覚えはないが、やはり普通に考えればすごいことなのだろう。

「敵増援部隊、後方より接近中」
「あ、まだ続くんですか？」
「ええ。いけるところまでいってみてください」
「敵増援部隊の編成、サザーランド１５騎」

……サザーランド１５騎。一気にレベルが上がったな。
まあシミュレータだし、いけるところまでいってみよう。今の僕の実力を知る絶好の機会でもある。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

ライは『いけるところまで』と言ったが、その『いけるところまで』というのがくせものだった。

「敵ナイトメアを撃破。敵の残存戦力、『サザーランド』8」

「ふふふ、すごいですね殿下。もう6騎倒しちゃったよ？」

「敵のさらなる増援部隊を確認。編成、月下4騎。2方面より急速接近中」

「ちょ、ちょっと待って！　なんなの！？　このシミュレータのプログラムは？」

「いやー、どこまでいけるかな？　と思いまして。倒せば倒すほどでてくるようになっているんですよ」

ロイドの性格上、今回のシミュレータは敵を倒せば倒すほど、どんどん敵が強くなっていくという、過酷なプログラムが組み立てられていた。しかも、その内容はただ単にレベルだけが問題ではない。

「月下４騎、交戦エリアに到達。特派月下、右肩に被弾。損傷は軽微」

「あー……すごいすごい。見ました？　今の動き。また１騎……いや、２機倒しましたよ」

「敵のさらなる増援部隊を発見。編成……月下指揮官機！？　交戦エリアに接近中」

「ロイドさん！　これってまさか、黒の騎士団の戦力を……！？」

「輻射波動、残弾ゼロ。飛燕爪牙、破壊。エナジーフィラー２２％。殿下……！」

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「いやー、すごかったですね。しかし殿下、汗だくですよ」

「……あれをやったら、汗だくにもなりますよ」

「あの設定はやりすぎです、ロイドさん！」

やっぱりロイドさんの組んだプログラムだったか……いや、途中からそんな気はしていたけど。

あんなプログラムをロイドさん以外の人が組み込んだなんて考えたくないし。

「でも結局、エナジーフィラーがなくなるまで戦い続けたんだから、いいんじゃないの？」

「ライ、大丈夫だった？　あんなに酷いシミュレータで」

本当にひどかった。途中、ガヴェインやランスロットまで現れたし……まあ、ランスロットが到着する前にエナジー切れになったわけだけど……

「でも、あそこまで出す必要あったの！？」

「まあまあ、シュタットフェルト卿。実際ガヴェインは戦闘には参加していませんし……」

「それでも、空中からずっと狙ってたじゃない！」

そう。ガヴェインは戦闘にこそ参加しなかった。しかし、隙あればいつでもハドロン砲を撃つと示すように、常に空中から月下を狙っていた……ゆえに陸上と空中、二つに対して常に気を回さなければならなかった。

「でもこれだけ戦えるのなら、殿下が戦場にでても何の問題もないですね……このロイド・アスプルンド。責任を持って殿下のナイトメアを用意させていただきます」

「……ああ。こちらこそ、よろしく頼みます」

これで一安心だ。おそらく、ルルーシュたちも次の戦いまでに戦力を整えてくるだろう。ナイトメアの質だって上がっているはずだ。

こちらも早いうちに、ロイドさんにナイトメアや新武装の開発をしてもらわないと。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

―――後日―――

僕は再びロイドさんに呼ばれた。研究所にはセシルさんの姿は見えない。どうやら今日は外出中のようだ。カレンは今日はジェレミア卿のところに部隊の様子を見に行ってもらっている。

つまり、今日は僕とロイドさんだけか……

「殿下～今よろしいでしょうか？」

「？　なんですか、ロイドさん」

「新パーツのテストを行いたいんですけど、よろしいでしょうか？」

「新パーツ？　もうできたのか？　……わかりました」

さすがに仕事が早い。なら、早速ためさせてもらおう。何事も早いにこしたことはない。

―――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「まずはこのライフルを試してみてください。基本はアサルトライフルと同じなんですが、モード切り替えで長距離からの狙撃もできます」

なるほど、通常モードは従来のアサルトライフルと変わらないが、狙撃モードにすると銃身が伸びるのか。

「敵を2機出すので、試しに撃ってみてください」

「了解」

レーダー画面にふたつの光点が現れた。

ここからは距離が遠く、正面モニターにはナイトメアの影も形も見えない。

こちらから接近するか、それとも……

「ロイドさん、この距離からでも狙えますか？」

「射程内です。モードを切り替えてみてください」

狙撃モードに切り替えると、モニターにターゲットサイトが表示される。

１騎の無頼にロックをかけて、トリガーを引く。

無頼が火を吹いて倒れた。

すぐ残った無頼に狙いを定めるが、違和感を覚える。

「ああ、狙撃モードでは速射はできません。通常モードに切り替えてください」

すぐに切り替える。

アサルトライフルと同じように使える。一回の速射で、無頼を撃破した。

「どうでした、殿下？」

「切り替えを使いこなせば、かなり助かる……ただ、エナジーフィラーの減りがやけに多いのが気になるんですが……」

ゲージを見ると、エナジーが余分に減っている。

「狙撃モードの時はファクトスフィアを開きっぱなしにして、なおかつ感度を増幅させますから……そのファクトスフィアも新パーツなんですけどね。あとライフルそのものも、狙撃モードでは通常モードの15倍のエナジーを消費します」

「だから速射ができないし、ロックに時間がかかるんですね」

「はい。使いすぎますと活動時間がどんどん短くなりますからね……殿下にはつけないほうがいいかもしれませんね。総大将ですしエナジー切れなんて一番危険ですからね……それじゃあ、次のパーツをシミュレータにロードしましょう」

ロイドさんは楽しそうな声で話しかけてくる。そのせいか、僕もなんとなくつぎのパーツが楽しみになってきた。

「これはショート・ソードなんですが……」

「……妙に柄(つか)の部分が長いですね」

「いいところに気がつきますねー。それ、2本つなげても使えるんです。いろんな使い方ができますよ。つねげて使ったり、分離して両手に一本ずつ持ってもいいですし、もちろん一本だけ使ってもいい。アタッチメントをつけてぶら下げておきますね」

なるほど。これは先ほどとは打って変わって近接戦闘用の武装か。これも期待できそうだ。

「じゃあ、敵機を出すので使ってみてください」

至近距離に三騎の無頼が現れた。

ショートソードを片手に持ち、無頼が振り下ろしてきたトンファを止めようとすると……特に手ごたえもなく、トンファがスバッと切断された。

そのままの勢いで無頼の肩口から胴にかけて、ソードを走らせる。無頼はあっさりと切断された。

「……すごい切れ味なんですけど。一撃で無頼が……制動刀と同等

の、いやそれ以上か？」

「大きさは違いますけど、機構はランスロットと同じ、メーザー・バイブレーション・ソードですからね」

「ＭＶＳですか。刃の部分が高周波振動してるっていう……」

「……殿下～。本当にナイトメアのことをよく知ってるんですね。もうそこらへんの騎士が見たら自信喪失しちゃいますよ～？」

……まあ、本当は戦っていたし。

苦笑したいところだったが、残った二機の無頼が襲いかかってくる。

今度は二本のソードをつないで一本にして、左の無頼に突きを入れ、引き抜きつつ反対側の刃を前に押し出し、右の無頼を腰からまっぷたつに斬りおとした。

「使い勝手はどうですか？　それ」

「いいですね。とくに複数のナイトメアと至近距離でもみ合いになったときには、かなり有効ですよ」

「なるほど。そのソードは凡庸性が高いですからね。量産も考えて

いるんですよ……うん。いいデータがとれました……せっかくですから、前回のリベンジいきます？」

「リベンジ？」

「ええ。前回はランスロットなどを相手に途中でエナジーが切れましたからね。藤堂などを相手に……やってみませんか？」

「……いいだろう。その挑戦受ける」

そう言われると、戦士である以上引き下がるわけにはいかない。今後のためにも良い勉強になる。

僕は再びシミュレータに挑んだ。

目の前には早速、四聖剣が揃っていた。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

―――二時間後―――

「「何をやっているんですか！？　ロイドさんはともかく、ライ（殿下）まで！！」」

「「すみませんでした」」

結局気がついたら二時間ぶっ通しでシミュレータを行っていた。完全に勝つまでやろうとしていたら、戻ってきたカレンとセシルに止められて……現在、二人で正座中です。

女性は怒らせると怖いと初めて知りました。

「殿下も気をつけてください！　ロイドさんはほっとくと何時間でも騎乗させようとしますので、殿下自身の判断で降りてください」

「そうよ！　ライ、本当なら貴方がすぐに降りなきゃいけいのよ！？　パイロットは体調管理も大切なんだから」

「うん。ごめんなさい」

……今まで皇族が自分の騎士に正座で謝るといった例があっただろうか？　今、ここではありえない光景が広がっている。

十分ほど説教が続き、やっと僕とロイドさんは解放された……足が痛い！！

ひとまず僕はロイドさんとセシルさんにナイトメアのことを任せ、離宮にカレンと戻って行った。

「ライ、お願い。本当に無茶はしないで……」

「？　カレン？」

「言ったでしょ。あなたは私が守るって。あなたが一人で全てを背負う必要なんてないんだから。

私も戦うんだから……もう、無茶なことはしないで！」

知らぬうちに、カレンにつらい思いをさせてしまったようだ。

確かに他のものからすれば、僕は一人で戦う戦士のように見えただろう。騎士団の戦力を相手に一人で相手をしていたんだから。

そんなことにも気付かないなんて、本当に馬鹿だ、僕は。

「うん、ごめんねカレン」

「一緒に戦いましょう。これからもずっと……」

カレンが僕の手を握り締めてきた。僕も彼女に答えるように力をこめた。

……そうだ。僕は一人じゃない。一人で戦っているんじゃない。頼もしい騎士が、パートナーが傍にいるんだから……

5．1話　　ライの実力（後書き）

作「投稿が遅れてすみません。次回はマリーカ、あるいはコーネリアとの出会いについて書きたいと思います」

ラ「……これはまた、なかなか難しい話を」

作「特にマリーカなんですよね。なにしろ、紅蓮によって兄・キューエルを失っているから、そこをどうするか……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9721v/

コードギアス　　相反する王～双璧の軌跡～

2011年11月16日02時28分発行